

関西学院大学 研究成果報告

2022年 5月 30日

関西学院 院長殿

所属：人間福祉学部

職名：教授

氏名：村上 陽子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：スペイン ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	スペイン語のポライトネスに関してー地域差の観点からー
研究実施場所	スペイン アリカンテ
研究期間	2021年 8 月 31 日 ～ 2022年 3 月 6 日（ 6 ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2021年度秋学期にいただいた学院留学短期では、当初予定していたコロンビア・メデジン市での滞在をスペイン・アリカンテ市での滞りに切り替え、研究活動を行った。変更の理由は、コロナ禍によってコロンビアの治安状況が悪化し、1都市に滞在している分には問題ないが、研究課題の遂行のためには複数の都市や村に移動し、滞在しながら分析対象を収集したり、調査協力者に会ったりする必要があり、その実行にはリスクを伴う可能性あることを否定できなかった。一方で、スペインでは、2021年5月ごろより国内外におけるあらゆる側面において開放政策が再開され、日本からの渡航も可能となったため、以前から研究教育活動において交流のあったアリカンテ大学のフリアン・ロペス氏の受け入れのもと、研究課題の遂行にあたった。半年の留学期間は大変短く、開放政策をとっているからと言ってコロナ感染がなくなったわけではなく、安全第一を心がけて自制しつつ研究活動を行っていたこと、また2021年12月半ばから2022年2月初旬までスペイン全土において感染爆発状況にあったため、予定していた分析対象の収集活動をすべて自粛せざるを得なかったことなど、残念ながら満足に研究が遂行できたとはいえない。しかしながら、スペインにおけるコロナ禍がいかなる状況を引き起こし、それに対してスペイン政府や滞在地のアリカンテ市が属するバレンシア州がどのような政策をとり、さらにアリカンテ大学の教員や学生たち、街の一般の人々の反応や行動に直接触れることができたのは、大変貴重な体験であった。

今回の短期留学の研究成果は次の通りである。

1) 公共サインで使用される待遇表現と指示表現に関する研究

研究課題である「スペイン語のポライトネスに関して一地域差の観点から一」は大変広いテーマであるが、近年、公共サインにおける待遇表現と指示表現を分析対象とし、研究を続けてきた。今回の短期留学においては、滞在地であったアリカンテ市、バレンシア市、マドリッド市、バジャドリード市、レオン市、ポンフェラーダ市、ウエスカ市、サラゴサ市などにおいてフィールドワークを行い、公共サインとその設置場所を観察したその後、約850枚の写真に収めた公共サインをGoogle Documentを使って文字に変換し、分析を開始した。

まだ分析の途中であるが、待遇表現に関しては、これまでに分析を行ったコロンビアのボゴタ市とメデジン市の公共サインには見られなかった複数の受信者（読み手）を表す待遇表現（2人称および3人称複数形）の使用が観察された。公共サインは個人に対して指示や注意喚起に従って行動を促すものであるため、複数形にする必要はないと考えられるが、指示を表す公共サインを作成し掲示している発信者から複数形の待遇表現を用いて「群衆」の一人として指示を受けるのと、単数形で「一個人」として指示を受けるのでは受信者の受け取り方が異なる可能性があるため、今後インフォーマント調査を実施したいと考えている。

指示表現に関しては、公共サインに限らず、指示内容の受信者への負担の大きさによって表現が変わることが様々な研究で示されてきているが、公共サインにおいても同じ法則が当てはまること、また、公共サイン(看板や張り紙)という限られた紙面であることや設置場所が選択される形式に影響を与えていることが留学期間中に収集した公共サインの現時点までの分析で明らかになっている。また、ボゴタ市やメデジン市、さらに日本においても公園や広場に公共の憩いの場である公園や植栽を大切にすることを促す公共サインやボール遊びを禁ずる公共サインが設置されているが、スペインにおいてはほとんど設置されていないことが分かった。公共サインの持つ機能とこれらの場所の持つ目的が相いれないとスペインでは考えられるのかもしれない、公共サインに対する価値観の違いが見て取れる現象であると考えられる。

半年間の留学で研究課題の完成はかなわなかったが、また新たな研究の種を多く獲得することができ、これまで行ってきた研究との対照研究も含めて引き続き研究を遂行していきたいと考えている。

2) 機械翻訳とスペイン語教育に関する研究

学院短期留学に際し設定した研究課題ではないが、2020年度より続けてきた本テーマについても、留学地においていくつかの研究成果があったので、最後に報告をしておく。

AI技術やICTに支えられた現代社会では、すでに機械翻訳が日常的なツールとして存在し、卒業後の社会においてもAI技術が生み出したツールのうちのひとつとして利用されていくことになるだろう。機械翻訳を適切に利用することによって、言語学習の促進と言語使用の活性化を可能にすることができないかと考えている。今回の留学期間中に、アリカンテ大学の外国人向けスペイン語コースの二つの授業に出席することを許され、授業観察と自らのスペイン語力向上のため、また、スペイン語による社会・文化的テーマに親しむ機会を得た。アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、ベラルーシなどから留学してきていた履修生たちにスペイン語学習における機械翻訳の使用と意識に関するアンケート調査を依頼し、同時に、2021年度春学期に本学で担当していたスペイン語I,III,IVの学生たちに同じ内容のアンケート調査を実施した。記述回答の詳細な分析はこれからの課題であるが、選択式回答では、日本、日本以外のどちらの学生たちも、学習レベルが向上すると機械翻訳に頼ることが少なくなり、頼るときには辞書がわりに綴りのチェックのために機械翻訳を使用していたり、語彙や表現を増やすという学習目的で使用していたりしていることが分かった。この結果から、やみくもに使用禁止をすることで学習者の学びを阻害する可能性もあり、効果的な共存の道を模索することを引き続き考えていきたい。

以上